

吃音を克服した卒業生

先日、8年前に豊翔高等学院を卒業したK君から連絡があり、2年ぶりにお酒を交わした。彼は高校1年生で不登校になり、引きこもりを懸念した両親からの相談を受け、留年の可能性も見えてきたことから通信制高校への転校と話が進んだが、彼の同意を両親から得ることはできなかった。やむなく、強引に2度家庭訪問をして本人と話すことができた。

彼は発達障害の課題もやや見受けられたが、友人関係のトラブルや人とうまく関われない原因は実は彼の吃音にあったが、さすがに「気に過ぎだよ！」とは軽々しく言えなかった。

彼は転校に同意し、豊翔高等学院での高校生活を始めた。1年生の9月だった。

週1回の登校ではレポート作成に取り組んだが、周りの生徒や職員と言葉を交わすことはほとんどなかったが、たった一人だが友達ができたことをきっかけに、アルバイトにも頑張るようになった。だが、イベントなどには一切参加せず、時折トラブルもあったがマイペースの高校生活を過ごし、そして卒業、福祉系の大学へ進学した。両親は大学に普通に通えるのか強く心配されたが、ひとりでも友達がおりアルバイトも継続していたことから、私は「大学通学への不安はない！」と太鼓判(?)を押した。だが、吃音の問題はまだ抱えていた。

卒業後、毎年お盆と正月には私に連絡をくれて、焼肉などを食べながら彼の生活の様子に聞き入ったものだ。介護福祉士の国家資格を取り介護施設へ就職、やがて自分は社会福祉士の方が向いていると思ったらしく、施設を退職しアルバイトをしながら専門学校に通い、社会福祉士の資格を得て、今、懸命に働いている。

先日に会って驚いた。彼の吃音は跡形もなく消えていた。彼は「人と話すことにプレッシャーがなくなった。」と言い、嬉しいことに「丹羽先生とは卒業後も気楽に話せて、自信にもなった。」と言ってくれた。豊翔高等学院は卒業後も生徒と関わり続けることを大切にしているが、私は彼と年に2~3回お酒を交わすことしかしていない。きっと、大学、就職、専門学校、再就職などの生活の中で、苦労しながらコミュニティの小さな自信を蓄積し続けたにちがいない。

別れ際に「次回は彼女を連れてきてよ！」と頼んだら、「あと3年待つて！」と返された。まだハードルがあるのだろう。

(丹羽 豊)